

2024年7月11日（木）～13日（土）

第18回パーキンソン病・運動障害疾患 कांग्रेस（栃木）

DAT スキャンによってパーキンソン病が否定された亜急性連合性脊髄変性症の一例

医療法人聖志会 渡辺病院 稲山 靖弘、渡辺 浩年

70歳代 男性 うつ病、アルコール依存症、高血圧にて通院中。X-3年 胃癌にて胃全摘術施行。X-10年にアルコール依存症にて受診歴があるが、以後断酒継続。X年、仕事の疲れから不眠となり飲酒量が増量したため受診、抗うつ剤、睡眠薬を処方し軽快した。X+2年、誘因なく歩行困難出現し、他院にてパーキンソン病、薬剤性パーキンソン症候群を疑われた。TUG17秒、振戦、固縮を認めたためスルピリドを中止したところ歩行障害が消失した。脳MRIでは、全体的に萎縮を認めるものの、新鮮脳梗塞はなく、DAT スキャンにおいても左右線条体への取り込み低下は認めなかった。X+3年、誘因なく下肢脱力を認めた。TUG17秒、振戦、固縮は認めず、ロンベルグ兆候陽性であったため、亜急性連合性脊髄変性症を疑い、採血施行後、VitB12の静脈投与を行った。その後、TUG12秒と歩行障害は軽快した。投与前のVitB12の血中濃度は、84pg/mlであった。今回、DAT スキャンを行ったことにより、鑑別が容易になり、治療薬を投与することにより軽快した亜急性連合性脊髄変性症の一例を経験した。